

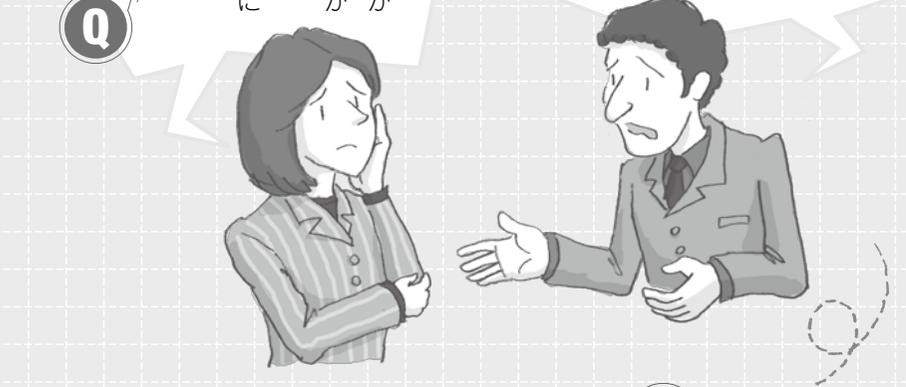
「きく力」を育てよう！

元新宿区立西戸山小学校教諭
安田 恭子

「きく力」を育てる3つの難しさ

Q 「ああ、授業だ」と思って、ほくが教室に入っても、子どもたちの前に立って、「さあ、学習をはじめよう」と声をかけても、おしゃべりを止めない子が大勢いるんだ。しつこい大きな声で、「話を止めなさい」と叫んでいる自分。全く情けないよ。

Q わたしのクラスは、とても静かでお行儀もよんで、わたしの声も聞かれない。今話したばかりのことが、しつこく質問して来るの。聞いてくれないで、返事ばかりして。



A 「学校生活の基本は『きく力』にある」といっても過言ではない。一人ひとりの子どもたち「きく力」を育てることが大切だ。しかし、「一方で『きく力』を育てることは、たいへん難しいとも言われます。その難しさを分析してみると、
① 指導の段階がわかりにくい。
② 指導の継続が難しい。
③ 指導の成果が見えにくい。」と3点に絞られるからです。今回は、あなたのクラスの子どもたちを、よく「きく力」にするための手だてを考えてみましょう。

段階的に「きく力」を育てよう

「きく力」には、段階があります。「聞くこと」からスタートして、「聴くこと」ができるようになり、最終的には、一人ひとりの心の奥底で「効くこと」につながるのが望ましいといえるでしょう。

実際の国語科の授業では、何よりも各学年に配当されている「話すこと・聞くこと」の教科書教材を十分に吟味しましょう。何をどのように指導することが、目の前の子どもたちに必要な「きく力」を育てることになるのかを見極めて指導することが大切です。

特に、「きく力」を育てる指導で気をつけたいことは、教師が大きな声で威圧的に子どもたちに話すことを避け、丁寧な言葉づかいで話すことです。

さらに、授業の合間や、朝の会や帰りの会といった少しの時間でも「きく力」を育てることができます。今回は、そのようなちょっとした時間を使った段階的で、効果的な継続指導の例をご紹介します。

低学年では聞く力に重点を！

低学年では、「聞く姿勢」をしつかりと身に付けさせましょう。聞くときの約束や合図を決め、パターン化することも効果的です。そのために、「なぜなぞあそび」をするとよいでしょう。問題を出す人の順番を決めたり、ヒントの回数を決めたり、ルールを工夫しながら行います。



中学年では聴く力に重点を！

中学年では、聞くことと聴くことの違いを理解させ、今、自分はどう聴かなくてはいけないか、考えさせましょう。そのために、「伝言ゲーム」をするとよいでしょう。ちょっとした時間を使い、席の列などを使って伝言し、伝わり方を競います。



高学年では効く力に重点を！

高学年では、聴いたあとに効いたことを確かめる活動を必ず取り入れるようにしましょう。そのために、「口頭のニュース紹介」をするとよいでしょう。二人が役割を交代しながら行ったり、クラスの友人に問いかけたりします。「どんな感想を…」と問いかけることが大切です。



「きく力」を育てるための4つのポイント

- 1 聞く聴く効く 場を工夫しよう!**

きく指導でいちばん大切なことは「場」を工夫することです。意図的・計画的に場を設定することを心がけましょう。
- 2 きいた後の活動を考えよう!**

きいただけで学習をよしとするのではなく、きいた後でその内容に関する活動を入れましょう。たとえば、話の中の大切なことばを使って文を作るなどすると、きくことができているか振り返ることができるでしょう。
- 3 立場を変えて考えさせよう!**

きくことの裏側には必ず話し手がいます。時に話す側に立たせることによって、きく大切さを気づかせましょう。
- 4 重点を決めて根気よく!**

何の指導もそうですが、何でもかんでもいっしょに指導しては効果が上がりません。1学期は…今月は…と、重点を決めたりくり返したりして指導を重ねましょう。



わたしたち大人でも、人の話をきくことは、なかなか根気のあることであり、受け止めるにしろ、疑問をもったときにもどう処理するかにしろ、多くの難しさがあります。

よく「教師は最大の言語環境である」と言われますが、いちばん効果的な手だては、教師がよい聞き手の見本を示すことです。子ども一人ひとりの話を丁寧に根気よくきくことを大事にしたいものです。

消極的「聞く」と積極的「聞く」

よしなが こうし 京都女子大学教授 吉永幸司

消極的「聞く」から積極的「聞く」へ

授業で、聞いてくる格好をしている子を、消極的「聞く」と位置づけ、聞いて行動し、発言し、話題にかかわる子を、積極的「聞く」と位置づけて考えてみよう。

1 「話す、書く、読む」活動と連動させる

消極的「聞く」の傾向の子は、目的をもたないで授業に参加している場合が多い。発問に対してもわかっているのかいないのか反応が鈍いし、課題の解決も消極的に見える。

積極的「聞く」の傾向の子は、質問をしよう、答えを発表しようというように、常に話し手に働きかけている。

消極的「聞く」でもそれほど不自由はないが、積極的「聞く」に意識を変えると、主体的になり学習が楽しくなる。

積極的「聞く」に意識を高めるには、「話す、書く、読む」という言語活動と連動させると効果がある。書くため、読むためという目的や課題をもつことで、積極的「聞く」意識が高まるからである。例えば、聞いたことに対して、感想を述べる、質問をするなどの話す活動、聞いたことをノートにまとめる、メモをする

2 「聞く」ことは人とかかわる力を育てる

消極的「聞く」であっても子どもも日常はそれほど不自由ではない。だからといって、そのままにしておく、その子は、人とかかわる力が育たないように思える。

子どもも日常を見ていると、聞くことが上手な子は友達が多いし、相手の気持ちを察して行動している姿をよく見かける。

話を聞く、指示に従って行動するなど聞く活動の底にあるのは、人に働きかけているということである。積極的「聞く」は相手への思いやりや人を大事にする事の始まりである。

「聞く」は、人の言葉を受けとる、受け入れるということなのだから。